君の温度

SOLID HEART

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の温度

【Ｎコード】

Ｎ５０８２Ｗ

【作者名】

ＳＯＬＩＤ　ＨＥＡＲＴ

【あらすじ】

大学生（♂）が恋をした。

そのお相手は……えっ？　幽霊？

「幽霊って足あるんだな」Ｂｙ　直人

夏の日

俺は、確かに感じたんだ。
君の温もりを。
それは、紛れも無い、君の存在証明。

―――――――――――

とある夏の日。少し散らかった部屋で、俺はコンポから流れる音楽を聴いていた。

「なあ、タク。このドラムのリズムどう思う？」
「ん～、アツいね～」
「だろ？　やっぱりな。このバンドの曲は、まさにロックって感じがするよな！」
「ん～、本当、暑いねぇ～」
「そっちの暑いかよ。ってか、俺の話聞けよ！」
「そんなに熱くなるなって、直人（なおと）くん。ちゃんと聞いてるよ」

暑くてしょうがない、という顔をしているこの男。俺と同じ大学に通っている二年生で、周りからはタクと呼ばれている。こいつとは中学時代からの縁で、よく一緒に遊んでいた。

「ところでタク、歌詞は思いついたのか？」
「いや～、暑くて暑くて頭が働かないわ～」

タクはそう言うとテーブルに突っ伏した。

「まあ今日は確かに暑いけどな……」

俺達は大学の仲間と四人組のバンドを組んでいて、俺はドラムを、タクはギターとボーカルを担当している。

今日は俺の部屋で曲作りについて話し合うことになっていたのだが、他の二人は都合が悪くて来れないらしい。

「あーっ！　暑すぎる！　ていうかなんでこの部屋クーラーついてないんだ！？　いじめですか直人くん！？」

この暑さにタクがやられかけている。

「無い物はしゃーねーだろ。エアコンのある部屋は母さんが掃除してるし」

「ならばこの手でお主の母親を……！」

何をする気だこの男は。

「やめとけ。俺に片手で背負い投げをかますような生き物だぞ、あれは」

「素晴らしいお母様ですね」

タクが扇風機と仲良く向かい合ってる横で、俺は楽譜と向かい合っていた。

「面白いリズムだな。フィルインも参考になりそうだし」

好きなバンドのスコアを見ながら、オリジナル曲につけるリズム

パターンを考える。こういう作業はやっぱり楽しい。没頭しすぎて丸一日ということもよくある。大学のレポートなんかもそっちのけだ。小さい頃から好きな物には時間を忘れて熱中していた。

今では何が面白いのかわからないオモチャや、徹夜でレベル上げをしていたロールプレイングゲーム。

高校では軽音部のドラムに惹かれ、即入部。ひたすら叩きまくっていた。

「直人くん、自己紹介中に悪いんだけど…アイスとかない？暑すぎて死んじゃう」

コノヤロウ。俺の頭の中はお見通しってか？

「あ、ああ、待ってろ。昨日買ったやつがある」

俺は立ち上がって、部屋を出た。後ろからは扇風機に向かって「ああ〝ぁ〜っ」と唸り続ける馬鹿の声がする。

「ったく、あいつは何しに来たんだよ…」

2階から1階へ降り、キッチンの冷蔵庫へ向かう。母親が掃除好きなせいか、家の中はいつもすっきりしていてキレイだ。キッチンもちゃんと整理されている。

「さすが母さん。冷蔵庫のなかまですっきりしてる」

飲み物の棚がタバスコのビンで満たされているが、細かいことは気にしないでおこう。

「さて、アイスアイスっと」

アイスを求め冷凍室を開ける。そして昨日買っておいたアイスを…って、あれ？

「アイスが無い…」

ソフトクリームやらモナカやらを買い込んでいたはずなんだが。まさか全部食べられたか！？

「いや、あの量だ。さすがに全部食べるわけないよな」

そう思ったものの、万が一ってこともある。念のため推理してみよう。

思い当たる容疑者は2人。母と妹だ。

妹は今、高校の部活に行っている。お菓子を食べるときは、いつも「食べていーい？」などと、俺に確認をとる。決して独り占めなどしない。

母は今、家の掃除をしている。お菓子を食べるときは、誰が買った物であろうとお構いなし、しかも無断で食べる。決して分け合うことなどない。

うーん、アイスを食べたのは…

合宿の名の下に

「母さん！　アイス全部食べただろ！」
和室の掃除をしている母に問い詰める。

「ええ」
あっさり認めたな。

「やっぱり。いくらなんでも食べ過ぎだろ…」
「ちょっとお腹空いちゃってね」

通販で買ったと思(おぼ)しき掃除道具を手に、母はそう言った。いやいや、ちょっとお腹空いちゃって食べる量じゃないって。お腹ピーってなるだろ、普通。

「まあ…アレだ、全部食べるならせめて俺に一言くれ」
「えぇ？　もしかして横取りする気？」
「しねぇよ。ってか、それはアイスを全部食ったあんたが言う台詞じゃねぇよ」
なんて独占欲の強い女だ。

母親を渋々納得させ、俺は2階の部屋へ戻った。それにしても、よくあれでお腹を壊さないな。

「すまん、タク。アイスは鋼鉄の胃袋に飲み込まれた」
「マジかぁ～」

タクは魂が抜けたかの様に横へ倒れた。

と、思った瞬間にまた起き上がった。

「じゃあさ、どっか食いに行こうぜい」

「外に出るのか？　余計に暑くないか？」

「店に入れば冷房きいてるでしょ」

ということで、近くのファミレスへ行くことにした。

「ひぃ～、日差し強すぎ」

タクが目を薄めながら言う。今日はこいつの口から夏に対する不満しか聞いてない気がする。

「男二人で歩くのも暑苦しいな～。隣が直人くんじゃなくて美女だったらな～」

それは俺に対する不満なのか？

「まあ、こういう時は彼女欲しいって思うよな」

実は、俺はこの２０年間、彼女というものをつくったことが無い。昔から女子とも仲良くしていたし、バレンタインチョコもよく貰っていた。中には本命もあったが、付き合うという気には一度もなれなかった。自分の生活の中へ足を踏み込まれたくなかったのだと思う。

「直人くん、恋愛について語ってるところ悪いけど、到着しましたぜ」

「お前はエスパーか」

こいつだけは敵に回したくないな。

店に入って中を見渡すと、意外と客が少なかった。適当に空いている席へ座り、メニューを開く。昼メシを食ってなかったことに気付き、途端に腹が減ってきた。

「なあタク、何食べるんだ？」

「ドリアうまそうだな…。でもハンバーグも手堅いよな…。あ、パスタもいいな…」

そうだった、こいつはかなり優柔不断な男だった。ひどいときには２０分以上迷うこともある。とりあえず俺はカルボナーラに決めて、タクが決めるのを待つことにした。

１０分後、タクが悩みに悩んでハンバーグに決め、ようやく注文することができた。タクの平均的なタイムと言える。もちろん、アイスとドリンクバーも忘れずに頼んである。

「やっぱりメロンソーダだよな～」

俺が注いで持って来たドリンクを飲みながらタクが言った。

「いや、タク。ドリンクはやっぱり」

「それより直人くん」

「聞けや」

せっかくドリンクについて語ってやろうと思ったのに。

「ああ、ごめん。直人くんのドリンク小話は今度聞くから」

「小話ってなんだよ。てか改めて話す気もねーよ」

何なんだこいつは…。今更始まったことでもないが。

「それより、直人さん。提案があるんですけど」

「なぜ敬語なんだ」

「私はバンドが成長するためにはどうすればいいのか、常に考えて来ました。」
「嘘だな」
「もちろん個人が成長することは大事です。しかし、それだけでいいのでしょうか！私はチームとして、絆をもっと強くするべきだと思うのです！」
「…で、提案っていうのは？」
こいつがこういう話をする時の流れは大体読める。恐らく今回は合――
「合宿しましょう！」
「断る」

予想通りだ。こいつは合宿という名の下でバカンスを楽しむつもりだ。

「直人くん！君はアレだろう？またどうせ『こいつは合宿という名の下でバカンスを楽しむつもりだ』とか思ってるんだろう？」
「頼む。認めてくれ。お前はエスパーなんだろ？そうなんだろ？」
こいつを研究機関に突き出してやりたいぜ、まったく。

「直人くん。遊ぶつもりなんてない。真面目にバンドのことを考えてるんだ」

いつになく真剣な顔のタク。もしかしたら今度は本気なのかもしれない。そうか、やっとタクもやる気になってくれたか。やっぱりボーカルがこうじゃないとバンドは――
「フフッ」
「おいタク。今笑ったよな？我慢できなくて笑ったよな？」
それからしばらくタクに諭され続けて、仕方なく合宿をすることになった。タクも真面目にやると言ってたし、たまには信じてみる

ことにした。具体的な打ち合わせはまた後日に持ち越し、その日はタクと別れた。

でも、なぜだろう。

嫌な予感がする。

☆直人とタクのドリンク小話☆

☆直人とタクのドリンク小話☆

「はい～どうも、タクです」
「えーと、直人です」
「いや～、暑い日が続きますね～直人くん」
「タク、この『☆直人とタクのドリンク小話☆』って何だ？」
「こんなに暑いとアイスが食べたくなりますよね～」
「聞けや」
「ここではちょっとしたお話、つまりドリンク小話をしていきます」
「なんかイマイチ状況が理解できねぇけど…」
「まあ、要はこの物語について色々話しましょうってことです」
「例えば？」
「例えば…直人くんの苗字って何？みたいな」
「そういえば話に出て来てないな」
「えっと…確か…平井…平田…」
「お前覚えてねぇのかよ！中学時代からの仲だろ！？」
「冗談、冗談ですよ平塚直人くん！」
「平岡です」

「……」

「タク、本気で覚えてなかったのか」
「えー、今回はここまで！またお会いしましょう！さよなら～」
「おい、逃げるなタク！」

直人コール

「お前らぁぁ！！ぶっ飛ぶ覚悟は出来てるか！！」
『ウォーーッ！！』
「燃え尽きても知らねえぞ！！」
『ウォーーッ！！』

ボーカルの煽りとそれに応える観客の声。やっぱりライブは最高だ。熱いね。

「今日は俺達ＳＴＡＩＮＥＤ　ＧＬＡＳＳ（ステンドグラス）のライブに来てくれてありがとう！次が最後の曲だ、いくぞ！！」

早いな、もう最後の曲か。…というか一曲も聞いた記憶が無いな。なんでだ？

「おい、そこ！何ぼけ～っとしてんだ！」

ん？どうしたんだろう。ボーカルの人がこっち側を指差して何か吠えている。むしろ俺をピンポイントで指差しているようにしか見えない。

「直人！お前だ！」
やっぱり俺だった。周りの観客も一斉に俺の方を向いた。でも、なんで俺の名前を知ってるんだ？

「直人！！」
と、今度は観客の誰かが俺の名前を呼ぶ。

「直人ォアアァ！！」
と、今度は観客の誰かが俺の名前をシャウトする。
『直人！！直人！！直人！！』
そして、会場が一体となって直人コールを始めた。どうすればいいんだ俺は。状況が把握出来ない俺を余所に、直人コールは続く。
『ナ・オ・ト！！ナ・オ・ト！！』
「直人ォアアァ！！」
ダメだ、俺の手には負えない。誰か助けてくれ。タクでも誰でもいいから助けてくれぇ！
『直人！直人！ナ・オ・ト！！』

――――――――

「――オト」
ん…
「ナオト」
ま、まだ直人コールが…
「直人」
やめてくれ…俺が何をしたって言うんだぁぁ！
「起きなさい直人！」
「おわっ！」

飛んで来たロケットパンチを間一髪でかわし、俺はベッドから飛び出した。

ん？ベッド？

「やっと起きたわね」

母親がくたびれたように言う。この若干散らかっている部屋は…俺の部屋か。

「よかった、夢だった…」目の前に立っている母親を見て俺は少しホッとした。

「直人、どんな夢見てたか知らないけど早く準備しなさい」

「準備？何の？」

いきなり準備とか言われても困るのだが。今は夏休みだし今日も特に用事はないはず――

「お友達が迎えに来てるわよ。合宿に行くんでしょ？」

やべえぇーーっ！！完全に忘れてた！そうか、今日からだったな…。

「玄関で待ってもらってるから、早くしてあげないと」

「わかってる！」

俺は猛スピードで着替えを済ませ、階段を駆け降り、玄関へ向かった。そこでは二人の友人が待っていた。

「悪い！すぐ荷物の準備するから、あと少し待ってくれ！」

「おいおい直人くん。寝坊はダメだろ～」

一人は、少し呆れ笑いのタク。今回の合宿を企画した男だ。まさかタクに注意される日が来るとは…不覚。

「早くしないと置いてっちゃうよ？」

もう一人の友人、こちらは女性だ。

「すまん、怜香。持ってく物はまとめてあるから、あとはバッグに入れるだけなんだ。3分で終わらせる」
「ふふ、じゃあ3分だけ待つね。もし終わんなかったら…ふふ」
怪しげな笑みをこぼしているこのお方は、久遠怜香（くおんれいか）。バンド唯一の女性メンバーで、ベースを担当している。黒のロングヘアーが似合う清楚なお嬢様という感じだ。容姿端麗で成績優秀、文句なしの女性だと言いたいのだが…。

「怜香ちゃん、ごめんなさいねぇ。ウチのボンクラ息子が迷惑をかけちゃって。」
「いえ、そんな。普通のボンクラじゃないですか。迷惑だなんて…」
おい。普通のボンクラってどういう意味だ。
「まったく…こんな風に育てた親の顔が見てみたいわ。ねえ、怜香ちゃん。」
「そうですねぇ。どんなボンクラなんですかね」
後ろから聞こえてくる会話にツッコミたいが、とりあえず部屋に戻って荷物の準備を優先させる。怜香は時々こんな調子になるんだよな…。
俺は急いで荷物を詰め込み、再び玄関へ向かった。

「お待たせ、準備出来たぞ」
「よ～し、では行きますか」
「3分ジャスト。さすがだね、直人」
俺は母さんに行ってきますを告げて、家を出発した。バンド合宿か…。タクがちゃんと練習するのか不安だが、楽しみなのは確かだ。
頭の中は音楽のことでいっぱいだった。

まだ、この時は。

バンドの起源

俺達は大きな一軒家へ到着し、インターホンを鳴らした。すると玄関から青年が出て来た。

「あ！やっと来ましたね。集合時間とっくに過ぎてますよ！」

「すまねえな透、遅くなっちまった」

爽やかな声で怒りながらも、爽やかな笑顔を見せている好青年。彼の名は朝霧透（あさぎり とおる）。俺達と同じ大学に通う一年生で、一つ年下だ。バンドではギターと作曲を担当している。

透とは高校も同じで、軽音部で既にバンドを組んでいた。その時の俺はドラムが叩ければいいと思っていて、バンドを組むことなどあまり考えていなかった。しかし、後輩として入って来た透に猛烈なアプローチを受けた。

『バンドを結成したいんですけど、ドラムを叩ける人が他にいないんです！平岡先輩はドラム歴一年とは思えない上手さですし、一緒にバンドを組みましょう！というか組みます！』

確かに、軽音部の他のドラマーはもうバンドを組んでいる人ばかりだった。透は最後の頼みで俺の所へ来たのだろう。

透の熱意に圧倒され、俺はバンドへ参加することにした。もちろん、タクも強制的に参加させた。この時点で、俺とタク、そして透の三人が揃うことになる。

そこへ透が誘っていた一年生のベースを加え、俺達のバンドは発足した。透の音楽センスはバンドの中でもずば抜けていた。小学生の

頃から始めたというギターは、もちろん上手い。上手すぎるほどだった。更に作曲も出来て、アレンジに関する知識もある。後輩とはいえど、俺は強い尊敬の念を抱いた。

オリジナル曲を中心に演奏していた俺達は、ライブハウスのイベントに出たりもした。お客さんが俺達の曲にノってくれると嬉しくてしょうがなかった。俺達はとても充実した活動が出来たと思う。

そんなこんなであっという間に俺とタクは卒業を迎えたが、大学に進んでもバンドの活動は続けることにした。

しかしある日、ベースのメンバーが受験に集中するためと言ってバンドを抜けてしまった。受験生を引き留めるわけにもいかなかった。

そこへ救世主の如く現れたのが同じ大学へ通う怜香だった。俺がバンドメンバーを探しているという噂を聞いたらしい。その時の俺は色々な人へ声をかけまくっていたからな…。

「平岡先輩、バンドの歴史を語ってるところ悪いんですけど出発してもいいですか？」

「お前もエスパーだったのか」

なぜ俺の周りには超能力者が集まるんだ。

「父さんが車で送ってくれるはずなんで、呼んできますね」

そう言うと、透は家の中へ入っていった。

ミーティング

「窓の外には海が見える。果てしなく広がる海。この先で、何が僕らを待っているのだろう」

「タク、それは歌詞か？」

「魂の雄叫び」

「帰れ」

今、俺達は透のお父さんの車に乗せてもらっている。助手席に透が座り、その後ろが怜香、真ん中は俺でタクは俺の右隣りという具合だ。

透のお父さんは音楽に関する深い知識があり、今回の合宿場所も提案してくれた。話によるとその場所は山の中にあるスタジオで、宿泊のための設備も整っているらしい。どんな所なんだろう。早く見てみたい。

車はもうすぐ高速道路を下りる所だ。窓の外には海が見える。タクの魂の雄叫びとやらではないが、果てしなく広がる海を見ると自然の雄大さを感じる。

高速道路を下りると、外は街中の景色に戻った。

「到着までもう少しかかるから辛抱してくれ」

と透のお父さんに言われて、俺は返事をした。山の中だ、確かに時間はかかるだろうな。その間、合宿についてみんなと話をしとくのもいいかもしれない。

「そうね、私もそう思う。練習内容とか確認しておかない？」
「怜香。お前もエスパーだったんだな」というわけで、俺は三人のエスパーと車内ミーティングをすることにした。

「皆さん静粛に。出席予定者は揃いましたね？」
「タク、お前が仕切るのか？」
「直人くん。静粛に」
「直人。静粛に」
「えっ？怜香まで？」
怜香の悪ノリが始まった…。

「ではミーティングを始めます。合宿中の練習についてですが…」
タクが計画した練習の予定を簡単に説明する。なんだ、意外と真面目に考えてるんだな。

「そして夜は『肝試し』となっております」
「ちょっと待て」

前言撤回。

「どうしました、直人くん？」
「タク、もう一度言ってみろ」
「どうしました、直人くん？」
「そっちじゃねえよ！その前だよ！」

「肝試し？」
「ああ、それだ。そんな話聞いてねえぞ」
タクめ、珍しく真面目に考えてると思ったら…こういうことか。

「直人くん。もしかして…」
「何だよ」
タクが少しニヤけた顔で言う。

「お化けが怖いのか～？」
「そ、そ、そんなわけないだろ」

「平岡先輩。お化けが怖いんですね？」
「いや、ち、違うって。ぜ、全然怖くねーし」

「直人。お化けが怖いんでしょ？」
「だから違うっつーの！ほ、ほら、アレだよ。やっぱりバンドの合宿だから練習に集中したいだろ？」

お、お化けなんか怖くない！

「はは、必死だな直人くん！大丈夫、冗談だって」
タクは笑いながら言った。
「痛いっ！」

タクに母親譲りのロケットパンチを喰らわせてやった。全く…人をおちょくるからだ。

その後、俺達はしっかりと練習内容を確認して、ミーティングを終えた。ちゃんとやれば有意義な練習になりそうだな。

そうこうしている間に、車はスタジオへと近づいていた。

カノン

「窓の外には美しい緑の世界が広がっている。この緑を守るために、僕らは何ができるのだろう」

「タク、それは魂の雄叫びか？」

「風の息吹、踊る森、照らす太陽。それはまるで」

「まだ終わってなかったのか」

俺達が乗っている車は、山中の舗装された上り道を快調に進んでいる。辺りには木々が立ち並び、風に吹かれて優しく揺れている。車の中では聞こえないが、おそらく外では葉と葉の触れ合う音が静かに奏でられているだろう。

「直人。さっきから私をずっと見てるけど、どうしたの？」

「え？　あ、いや、俺は外の自然を見て癒されてただけなんだが」

窓の外を見ていたつもりが、怜香に何か勘違いされたようだ。

「ふーん」

ふーんって。ムスッとした顔でふーんって言われた。俺、何かしましたっけ？

「怜香。俺、何かまずいこと言ったか？」

怜香は外の景色に顔を向けている。

「馬鹿野郎」
「なっ。いきなり馬鹿野郎はないだろ、おい」
痛烈な四字熟語を俺に放ったまま、怜香は押し黙ってしまった。よくわからんが、怜香の機嫌を損ねてしまったようだ。俺は景色を眺めてただけなんだけどな。

車内はしばらく会話の無い状態が続いている。透はどうやら寝ているようで、微かに寝息が聞こえてくる。タクの方を見ると、これまた透と同じくおやすみ中だ。さっきまで魂の雄叫びがどうこう言ってたのに、切り替えが早いやつだな。
オーディオから流れるクラシック音楽が、眠気を誘っているようだ。そういえばこの曲、どこかで聴いたことがある。曲名は確か――
「パイナップルじゃなくて、ジングルベルでもない……曲名はキャノンだったような……」
「パッヘルベルのカノンだよ」
俺の思わずこぼれた独り言に、透のお父さんが答えてくれた。
「あ、それです」
そうだ、カノンだ、カノン。俺、キャノンって。危うく名曲が兵器になってしまうところだった。
「馬鹿野郎」
「怜香。誰にでも間違いはあるものなんだ。その間違いを糧にして成長していく。それが」
「馬鹿野郎」

「違う。それは馬鹿野郎じゃない。とにかく、人間に間違いは付き物ってことだ」
「本当に？」
「本当に」
「じゃあ、直人」
「何だ？」

怜香が久しぶりに俺の方へ顔を向けた。うむ、改めて見ると、やっぱりアジアンビューティーという言葉が似合いそうな美人だ。

「さっき見てたのは景色じゃなくて、私だよね？　そうだよね？」
「いや、景色だが」

「……ボンクラ」
と、また一言残して、怜香はそっぽを向いてしまった。俺は正直に答えただけなのに！

「直人くん。女性の心は繊細なんだから、気を遣わなきゃ」
「いつの間に起きたんだ、タク」

「それより直人くん。そろそろ着くみたいだ」
タクが指差した前方を見る。そこには、確かに建物が見えた。

「予約時間にぎりぎり間に合いそうだよ」
と、透のお父さんがホッと安心したように言う。

いよいよ合宿開始。
この2泊3日は、バンド漬けだ。音楽のこと以外は考えない。　そう思っていた。

怜香

「これで全部かな。忘れ物は無いよな？」
「ありません、平岡先輩」

俺達は駐車場に停めた車から荷物を降ろし、車内に忘れ物をしていないかチェックした。駐車場の周りを見渡してみると思ったよりも開けた場所で、少し離れた街を眺めることもできる。
建物の方へ振り返ると、こちらは白っぽいシンプルな外観ながら、降り注ぐ日差しに照らされて煌めいて見える。

「綺麗だな～」

タクがギターケースを肩に掛けながら呟いた言葉に、怜香もうんうんと頷く。

「さて、準備が出来たみたいだしロビーに行こうか」

運転に疲れたのか、体操のように体を伸ばしたり捻ったりしながら、透のお父さんが言った。俺達は荷物を持ち、建物の方へ歩き出した。
そういえば、俺以外のメンバーは自分の楽器を持って来てるから手荷物が多いんだよな。俺はスタジオのドラムを借りるから、スティックやその他の小物しか持って来ていない。まあ、タクと透はともかく、怜香は一応レディーだ。バッグくらいは持って差し上げるのがジェントルマンというものだろう。
「怜香様。よろしければそちらのバッグをお持ちしましょうか？」
「馬鹿野郎」
「私は馬鹿野郎ではありません」

「ボンクラ」
「俺はボンクラじゃない」
「馬鹿ボン」
「やめろ。その名前はどこかで聞いたことがある。彼は天才だ」

怜香め、心なしか表情が楽しそうだ。風になびく黒髪と相まって美しいのがニクい。

「じゃあ、お言葉に甘えてもいいかしら？　優しい紳士さん」

怜香が両手で黒いバッグを差し出す。

「お任せあれ」
と、それを受け取り肩に掛ける。しかし予想以上に重かったせいで、一瞬よろめきそうになった。この重量感、俺のキャリーバッグとは比べ物にならない。

「怜香。このバッ――」
「あ、直人。バッグの中身とか聞いてきたら抹殺するからね」
「バ、バンド最高！」

緊急回避。

「ふふ、いきなりどうしたの？」

危ねえ。今のは本当に危なかった。訳のわからんことを言ってしまったが、存在を消されるよりはマシだ。

「とりあえず部屋まで持っててね」
「もちろんです」

「喉が渇いちゃったな。飲み物ある？」
「こちらをどうぞ。冷たいお茶です」
「後で靴磨いて」
「何なりと」

ジェントルマンというより召し使いだな……。
ロビーで受け付けを済ませた俺達は、ひとまず部屋へ荷物を置きに向かった。透のお父さんは合宿が終わったら迎えに来ると言い残し、車へ戻って行った。今回の合宿費用もかなり負担してくれて、本当に頭が上がらない思いだ。

「早くして、直人」
「ああ、悪い。ちょっと重たくてな」

スタスタと階段を上る怜香の後ろに、ヘビー級のバッグを持った俺が続く。男三人は同じ部屋なのだが、流石に女性である怜香には別の部屋が用意された。しかし、自分の荷物を先に置いてきたとはいえ、この重さには参ってしまう。

「この部屋だよ」
「はあ……、こんな短い時間で疲れたのは久しぶりだ」
怜香に続いて部屋に入り、適当な場所へバッグを置く。

「ここでいいか？」
「うん、ありがと」

振り返りざまに笑顔で頷く怜香。あ、可愛い。……いかんいかん、見とれてしまった。

「一人で使うには少し広い部屋だな」

部屋の方へ目を逸らす。

「そうね。直人、こっちに来る？」

「それじゃあ部屋を分けた意味が無いだろ」

喜んで！　と言いたい所だが、我慢だ。

「冗談。荷物の整理終わったらそっちの部屋に集合でいい？」

「ああ、よろしく頼む。じゃ、また後でな」

そう言って部屋を出ようとした途端、怜香に腕を掴まれた。

「何だ？」

じっとこちらを見つめてくる怜香の瞳にドキドキしながら聞いた。

「靴磨き」

「……はい」

SENSE

「さ〜て、練習を始めようか」

俺の全力靴磨きが終わり、男組の部屋に四人が集まったところで、タクが切り出した。

「そうですね。タク先輩、新しい曲の歌詞はちゃんと書いて来てますか？」

「もちろん」

タクがテーブルを離れて窓際のベッドに向かい、そこに置いた荷物からノートを取り出す。この部屋にはベッドが四台あるため、一台は荷物置きにしている。

「とりあえず読んでみて」

テーブルに戻ってきたタクは、ノートを開いて俺に差し出した。開かれたページを見ると、丁寧な字で歌詞が書き込まれていた。横線で何度も消した跡があり、書き直しを繰り返していたようだ。普段はふざけているように見えても、やるべきことはしっかりやる。タクのいい所だ。

「あまり褒められると照れるよ、直人くん」

エスパータク。忘れてたぜ。

それより歌詞だ。今度は感情的な曲だから、言葉の一つ一つが更に重要になる。タクはどんな歌詞を書いてきたのだろうか。

『――確かに感じたんだ　君の温もりを
それは紛れも無い　君の存在証明――』

「……うーん」
一通り読んだ俺は少し首を傾げた。

「ダメかい？」
「なんか、こう……どっかで聞いたような歌詞なんだよな。タクの独特のセンスが発揮しきれてない」
「こういう曲が初めてだったからね～。やっぱ合わないか」
「いや、曲自体にはマッチしてると思うが。透はどうだ？作曲者としての意見を聞きたい」
ノートに書かれた歌詞を読み、透が口を開く。

「確かによくありそうな歌詞ですけど、雰囲気は僕の頭に浮かんだメロディーと合ってる気がします。この歌詞を基本に練習して、少しずつ手を加えていきましょう」
「そうだな。タク、まずはこの歌詞で歌ってくれ」
「オッケ～イ」
「それと怜香、ベースの音は……って、何で泣いてるんだ？」

俺の左隣りに座っている怜香は、なぜか涙を流していた。
視線の先にはタクのノート。

「……まさか、感動して泣いてるなんて言わないよな」
「……ぇぐっ、ぇぐっ」
「マジ、か？」
「……うっ、うっ」

零れる涙を指で拭いながら頷く。なんて感受性豊かな女性なんだ。この段階で泣かれたら、演奏中にも泣き出してしまうのではないかと心配になる。

「まあいい。話を戻すが怜香、ベースの音のイメージは固まったか？」

「えぐっ、うん」

「よし。じゃあこれから一度みんなで合わせてみて、そのあとまた各々感想を述べることにしよう」

実際に音を出して合わせないと始まらない。そして席を立とうとした時、透に呼び止められた。

「あ、平岡先輩。一ついいですか？」

「どうした？」

「一週間くらい前にまた新しいメロディーが浮かんだので、その曲もパソコンで編集して持って来てるんですが」

「おお、すげえな。聞かせてもらってもいいか？」

「はい、もちろんです」

透が持参していたノートパソコンを開き、編集したファイルを呼び出す。再生のアイコンをクリックするとテンポの良い疾走感溢れる曲が流れ出した。

「いいな、この曲。メロディーがわかりやすい」

「そうだね。ドラムの音も直人くんが実際に叩けばもっと明るく響くだろうし」

このファイルは各楽器が編集ソフトウェアのサンプル音で演奏されているため、少し機械的な音になっている。生演奏になればよりメロディアスで疾走感のある曲になるはずだ。

「透はさすがだな。せっかくだからこの曲も練習してみるか」
「そうですね。あ、でもタク先輩は歌詞がないと歌えないですよね？」
「う～ん。とりあえず適当に言葉を入れて歌ってみるよ」
「じゃあ、行くか」

話をまとめた俺達はスタジオへ向かい、練習を始めることにした。
スタジオにはいくつか防音室があり、俺達はBという札が貼られた防音室を使うことになった。部屋の中には大きな鏡があり、パフォーマンスの確認も出来るようになっている。
俺は受付で借りたチューニングキーを使ってスネアやタムの張り具合を調整し、シンバルなどを叩きやすい位置に配置した。
試しにスネアを軽く叩くと、透き通った綺麗な音が響いた。

「スネア、いい音だね」

怜香がその音を聴いて言った。確かに、思ったよりいい音だ。今まで行ったことのあるスタジオの中で一番かもしれない。まあ、叩きようによって良くも悪くも変わるのだが。

透

俺達は楽器のチューニングを終えると、皆で合わせる前のウォーミングアップも兼ねて個人の練習に移った。

適当なフレーズを叩きながら皆の様子を見る。

タクはギターを少しだけ弾くとすぐにマイクへ持ち替え、歌の練習を始めた。目立った特徴があるわけではないタクの声だが、日ごろのタクからは想像できないような声量と音域を持っている。

透は譜面台に置いた楽譜とにらめっこしながら音を鳴らしている。時折首を傾げているが、いつもの事なのであまり気にしなかった。透の音へのこだわりは知ってるからな。

ドラムの俺にとっては同じリズム隊である怜香の仕上がり具合が気になる所だ。

「怜香！　『君の温度』をちょっとだけ合わせてみないか？」

ドラムを叩く手と足を止め、怜香に声をかける。

「いいよ。どこにする？」「とりあえず初めから。区切りのいい所で俺が止める」

俺は怜香が頷いて準備し終えるのを見計らい、スティックで四回カウントをとった。

入りはピッタリだった。お互いの音を聴きながら、演奏を続ける。

あまりテンポの速い曲ではないが、人と合わせるのは案外難しいものだ。だが、いつも一緒に練習していれば自然と合ってくるようになる。

俺はワンコーラス終わった辺りで演奏を止めた。

「よし。ありがとう、怜香。いい感じだな」
「だね。今日は調子いいかも」

怜香が微笑みながらベースを鳴らす。その笑顔と低音のギャップが、何と言うか、いい。うん。いい。

各々ウォーミングアップも一息ついたので、四人で演奏することにした。

「じゃあ、『君の温度』やりま～す。直人くん、カウントよろしく！」
「任せとけ」

スティックを構え、さっきと同じように四回カウントをとる。

曲の中で多少のズレはあったが、最後まで止まらずに演奏ができた。合宿の最初にしては十分な出来だろう。

「うーん……」

と、思っているところで聞こえてきた透の声。

「どうした？」
「僕のギターの音だけ浮いてるような……チューニングが合ってないんですかね？」
「いや、特に何も感じなかったけどな」

確かに透は演奏中も度々首を傾げていた。俺は違和感なく演奏できたのだが、透は納得してないようだ。

「ちょっとピックを変えてみます」
「そうだな。せっかくの合宿なんだし、色々試すのもいいかもしれ

ない」

その後、透はピックを何回も変えたり演奏方法を変えたりと試行錯誤していたが、満足できる音は得られなかったようだ。

それどころか俺の耳でもわかるほど音がおかしくなっていた。

これは俺より遥かに耳のいい透にとって苦痛だろう。

「あーもうっ！　イライラする……」

珍しく苛立ちをあらわにする透。髪をくしゃくしゃにし、激しく足踏みをしている。

これはまずいな……。気分転換のために練習を一旦中断するべきか。

「透、一旦外に出よう。気分をリセットしないとだめだ」

「はい……」

透は性格上、自分のせいで練習を中断させてしまったと感じるだろう。だからあまり止めたくなかったのだが、今回は仕方ない。

「二人は練習を続けてくれ」

タクと怜香にそう言い残し、俺達はスタジオを後にした。

ロビーを抜けて外に出ると、景色は夕陽に染まっていた。

「あそこの散歩道に行くか」

建物の裏には森の中へ続く道があり、その道は散歩のために整備されていると透のお父さんから聞いていた。

もし俺が音に悩むことがあれば行こうと思っていたのだが、まさ

か透のために行くことになるとは。

「透らしくないな。自分の出す音が気に入らなかったか？」

オレンジ色の光が包む森の中を歩きながら、透に問いかけた。

「なんだかはっきりしないんですけど、僕の音だけズレてるような、そんな気がしたんです。ベースもボーカルも平岡先輩のドラムにしっかり乗ってるのに、僕だけ皆さんと合ってないような……」

「原因もわからないから、余計にイライラする」

「……はい。色々試しても悪くなるばかりだし……。すみません。せっかくの合宿なのに」

透は肩を落とし、若干うつむいている。俺はその肩を軽く二回叩いた。

「おいおい。こういう時に皆で悩んで頑張るから合宿なんだろ？独りで抱え込んだら合宿の意味がないからな。どんどん悩みや考えをぶちまけて来い」

こういう台詞って言うのが恥ずかしいんだよな。透に笑われたりしないか心配だ。

「……ぷははっ、平岡先輩が言うとなぜか可笑しいですね！」

ま、マジで笑われた！コノヤローめ！

「おい、笑うんじゃ――」「でも、頼りになります。やっぱり平岡先輩にはかないません」

「え？」

「ありがとうございます、先輩。時間はあまりかけられないかもしれないけど、できるだけ良い音を目指します」
「そうだな。皆で納得いくまで音作りをしよう」

とりあえず、透の気持ちは晴れたみたいだな。あとは時間をかけていくしかない。

「もうちょっと散歩して戻るか」
「そうですね」

俺達は舗装された道を歩き続けた。他に散歩している人がいないか探してみたが、人の姿は全く見当たらない。
あまりタクと怜香を待たせても悪いので、俺達は引き返すことにした。
その道中だった。

「平岡先輩。あれ見てください」
「ん？　何か見つけたか？」

透が森の奥を指し示す。その方向を見ると、そこには人の姿があった。

「あんな所で散歩か。珍しいな」
「違うと思いますけど……」

何をしているのか気になったので少し様子を見てみたが、髪の長さや服装から女性だというのはわかったものの、その人はただ立っているだけで全く動かなかった。

「先輩。日が暮れそうなので戻りましょう」

「そ、そうだな。急ぐか」

これが、始まりだった。

二人の気持ち

スタジオに戻ってからの透は普段より生き生きとしていた。苛立ちをあからさまに表へ出していたさっきまでとは違い、音の追求を楽しんでいるようにも見えた。

夜になって練習を終える頃には理想の音を見つけられたようで、爽やかな笑みも顔に帰って来た。

まさかこの短時間で悩みを払拭できるとはな……。透の才能には驚かされてばかりだ。俺も足を引っ張らないように頑張ろう。いや、逆だな。皆をリードしないと。

俺はスタジオから部屋に戻ると、窓から外を眺めながらそんなことを思っていた。

「平岡先輩、夕飯食べに行きましょう。タク先輩は一足先に行っちゃいました」

後ろから聞こえる透の声。夕飯か。そういえばここには食堂があるんだった。

「はは、タクらしい。あいつは食べたい物を選ぶのに時間がかかるからな」

「先に行ってて正解かもしれないですね」

その後、俺達は食事と入浴を済ませ、各自でのんびり時間を過ごすことにした。

タクと透が部屋でノートパソコンの画面を食い入るように見ていたので、何を見てるのか気になったのだが、俺はそれよりも気になることがあった。

透と外へ出た時に森の中で見かけた女性。あの人は何をしてたん

だろうか。そのことがなぜか頭に強く残って離れず、引っ掛かり続けていた。
そして俺の体は自然とあの森へ向かって動き出した。

「直人、どこ行くの？」
と、一階の廊下を歩いている所で怜香に呼び止められた。

「ああ、ちょっと……散歩に」
「散歩かあ。私も行っていい？」
「えっ？　えーっと……」
「……ダメ？」

俺が答えに詰まると、怜香は少し哀しげな表情を浮かべた。

「いや、そんなことない。行こう」
「やったぁ、ありがと」

こうして二人で散歩することになった。
本当はもう一度あの女性がいた場所を見に行くだけのつもりだったが、怜香の申し出を断る理由もない。というか、あの表情を見せられて断るなんてできるはずがない。
俺と怜香は横に並んで散歩道へ向かった。

透と来た時とは違い、月明かりが木々の隙間から差し込んでいて、虫のざわめきが森の中で響いている。ここから見る月は幻想的で、どこか妖しい。

「透くんとはどんな話をしたの？」
「たいしたことじゃないが……。『悩みは一人で抱え込むな、どんどん俺達にぶつけてこい』みたいなことを言った」

「ふふ、それって直人が言うとちょっと可笑しいね」
「透にも同じことを言われたよ」

怜香が笑い、俺も笑う。なんだろう、怜香といる時のこの感覚。少し鼓動が速くなってる気がする。でも、なんだか心が落ち着く。不思議な感覚だ。

「なあ、怜香」
「なに？」
「どうして俺達のバンドに入ろうと思ったんだ？　大学には他のバンドもあったのに、何で俺達と？」

捉えようによっては失礼に聞こえる質問だが、ずっと知りたかったことだ。

「うーん」

手を後ろで組み、空を見上げる。その怜香の口元は緩み、綺麗な笑顔を生み出す。

「初めは直人達を見てて楽しそうなバンドって思った。けど、そう思っただけで入るつもりはなかったの」
「じゃあ、なんで――」
「でもね。直人のことを見てるうちに、音楽に対して本気で打ち込んでるんだってわかった。もちろん、タクくんと透くんも。他のバンドは趣味でやってるような人ばかりだったから、真剣に音楽と向き合ってる人がいなかったの。だから、嬉しかった」
「それで入ってくれたのか」
「うん。ここなら頑張れるって思ったんだ」
「なんだか照れるな……」

自分の顔が熱くなってくるのがわかった。俺は無意識に頬をポリポリと掻いていた。

「あとね、直人」

怜香が不意に立ち止まる。俺も歩みを止め、怜香の方を向く。そして一呼吸置いて――

「私、気付いてる。私の中で、直人の存在が大きくなってること」

俺の鼓動がまた少し速くなる。

「音楽と同じくらい……直人が好きってことに」

一気に鼓動が加速した。今までに経験したことのない感覚。

「えっ……？」

顔だけでなく、全身が熱くなる。

「直人が彼女をつくらないことは知ってる。でも、やっぱり好きだから……待ってる。ずーっと、待ってるよ」

「怜香……」

気がつくと俺は、怜香を自分のもとへ抱き寄せていた。お互いの背に手を回して強く抱きしめ合う。

今、あの不思議な感覚が何だったのかわかった。

俺も怜香のことが好きだったんだ。

「待たせない」

もっと早く気付きたかった。怜香の気持ちに。

「もう、待たせないぞ」

気付くチャンスはたくさんあったのに、俺が不器用だから気付けなかった。

頭の中に残っていたあの女性のことなど、どうでもよくなっていた。

どうでもよくなっていたはずなのに……。

「あれは――」

お互いの想いに気付いた帰り道。彼女は俺の前に現れた。

散歩道に立ち、こちらを見つめている。優しい視線だが、どこか不気味な雰囲気を漂わせている。

見た目から察するに高校生くらいだろうか。カジュアルな服装で、肩まで伸ばした黒髪が風になびく。

「ど、どうかしましたか？」

声をかけるが返事はない。ただずっと、俺達を見ている。聞こえてないのかと思いもう一度声をかけたが、やはり返事はない。

「行こう」

埒があかないので、俺は怜香の手を引いてその女性の横を通り抜けた。

少し歩いたところで振り返る。女性はまだ俺達を見つめている。

「ちょっと怖いね……」

怜香がそう言った直後。女性は俺達に背を向けた。そしてその体を淡い光が包み――消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5082w/

君の温度

2012年1月13日03時11分発行